

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/16420 |

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

岩 井 憲 幸

A Study on Materials Concerning Daikokuya Kōdayū, Koichi, and Isokichi

IWAI Noriyuki

In the past two years, I have examined several less known materials concernig Daikokuya Kōdayū, Koichi, and Isokichi, who were brouht to East Yezo by Adam Laksman, a Russian envoy, in 1792, after having drifted to Russian territory and lived there for some 10 years.

Unfortunately, on April 4, 1793, Koichi died of scurry on board a Russian ship just before landing at Nemuro. The Russian delegation wintered there waiting for a reply from Japanes authorities in open negotiations about trade. The next year, 1794, A. Laksman met Japanese plenipotentiaries from Yedo at Hakodate, but they refused to trade with Russia because the door to foreigners had been closed. Kōdayū and Isokichi were handed over to Japanese authorities at Hakodate and were escorted to Yedo in order to undergo an examination. Then they were ordered to stay together at Yedo under the carefull watch of the authorities. In 1797, Isokichi was permitted to go back to his native village, Minami Wakamatsu, at one time; similarly, Kōdayū went back there in 1802. In 1794, the authorities granted to Koichi's widow Ken the articles left by him; she and other concerned persons then put them on view for the general public under the pretext of doing service to the dead.

The following descriptions of the materials are based on my inquiries. Materials (1)~(3) belonged to Kōdayū, (4) to Koichi, and (5) and (3) to Isokichi.

- (1) *Ikokujinzu*: a votive picture tablet in Kōra shrine, in Aomori Prefecture, 141×34.5cm. 9 Russians in their room were drawn in color on a board of Japanese cedar. Its composition is very similar to *Roshiyajin Nemuro ettō shitsunaizu* in the Tenri Central Library. The tablet appears to have been made at Hakodate in 1793, and the next year it was dedicated to the shrine by Ōsawa Tomiemon, a prosperous farmer living near there at that time.
- (2) *Oroshiya tsūji nikki*: a Russian-Japanese vocabulary in the Aijitsu Collection, Ōsaka, 22.5×17.2cm. The manuscript has 15 leaves in which many Russian words are written in Katakana characters, with a Japanese translation in Kanji characters on the right side of each. The manuscript is nearly the same as *Oroshiya tsūji nikki*, one part of *Oroshiyajin raichōki*, in the National Archives, Tokyo. But the former is closer to the original; the latter is a revision. More importntly, the manuscript has the date of its copying, Kansei 7 (1795), which suggests the date of the compiling of the original vocabulary. Until now, there has been no data regarding this

issue.

(3) *Daikokuya Kōdayū, Isokichi gafuku*: a hanging life-sized picture in color of Kōdayū and Isokichi in Suzuka City, 191×56cm. It is a unique picture. The painter inserted two men into a composition based on a picture in the book *Kikanroku*, a classical Chinese translation of Katsuragawa Hoshū's *Hyōmin gorannoki*.

(4) *Isenokuni Kawawagun Minami Wakamatsmura hyōmin Koichi shōraizu*: a record in pictures of the articles left by Koich in the Hakodate City Library, 29.4×20.6cm. It contains 47 sketches in color, drawn in Kansei 6 (1794) at Koichi's native village, Minami Wakamatsu. Unlike the articles in the sketches of Kōdayū's articles in *Hokusabunryaku zukan*, the articles left by Koichi, as shown in these 47 sketches, were those of ordinary Russian people.

(5) *Roshiyashiki*: a small Japanese-Russian vocabulary in Suzuka City, 12.2×17.3cm. It contains less known vocabulary, and may have belonged to Isokichi. It has about 250 Russian words written in Katakana characters. Notation of the Russian affricate [ts] in a Katakana character in the vocabulary is unique. It is probably because Koichi had a different sense of the Russian language from Kōdayū's. The vocabulary has some relationship to *Roshiyabengo*, a Russian-Japanese and Japanese-Russian vocabulary compiled by Gen Yū, held in the National Archives.

The materials were made in the early years after the return to Japan of Kōdayū, Koichi, and Isokichi.

《個人研究第2種》

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

岩井憲幸

はじめに

本研究は、寛政4年（1792）ラクスマンに伴われて帰朝した伊勢漂民にかかわる資料の研究の一端だが、今回はとくに従来かえりみられなかったりあるいは見おとされていたりした資料につき、調査・検討を行なったものである。青森の高良神社「異國人圖」、大阪・愛日文庫の『亞魯齊亞通辭日記』、鈴鹿市の「大黒屋光太夫・磯吉画幅」、函館市中央図書館の『伊勢國南若松村漂民小市將來圖』、鈴鹿市の『魯西亜詞記』を中心にして、関連資料を援用しながら、これら諸資料の特徴点を明らかにし、わが国でのロシア研究史上での位置を探ってゆきたい。以下光太夫、小市、磯吉に関する資料順に記述をすすめる。

1 光太夫に関する資料

その第1として「異國人圖」、第2に『亞魯齊亞通辭日記』、第3に「大黒屋光太夫・磯吉画幅」につき述べる。

前者は、現在青森県三戸郡五戸町倉石に存する高良（こうら）神社^(註1)に今も掲げられているところの絵馬である。実際はその中に光太夫の姿は描かれていないが、天理大学附属図書館所蔵の「ロシア人根室越冬室内図」とのかかわりから、光太夫に関連する資料として、検討することにしたい。

この絵馬はゆるい山形をなし、右端約32cm、下端約141cm、中央部幅約34.5cmの大きさをもつ。恐らく杉板に彩色されたもので、計9人の人物が描かれている。今日ではガラス入りの木枠にはめられて、主殿内左側上方

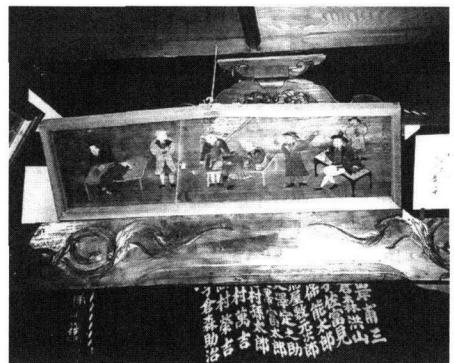


図1 高良神社所蔵「異國人圖」 本体下端141cm、中央幅34.5cm

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

に掲げられてあった(図1参照)。原物右端に〈寛政六甲寅正月〉(1794)とあり、左上部に〈奉納〉、左端上に〈異國人圖〉、さらに左端下方に〈大澤富右衛門政續(花押)〉との墨書がある。また〈異國人圖〉の右脇には2行で〈寛政五年丑六月廿八日ニ赤人拾貳人松前城下エ渡来服紗ハ羅紗煌々非計〉^(注2)と、中字によって注する。寛政5年は、光太夫らがラクスマンに伴われてネムロに帰国した翌年にあたる。絵ははじめ、上述した松平定信旧蔵の「ロシア人根室越冬室内図」に似たものを予想していたが、本図はこれによく似ているとはいえ、細部において異なっている。なによりも光太夫が描かれていない。しかし、ラクスマン、シャバーリン等ロシア人9人を、定信旧蔵図の構図に似せて描いているのである。しかも、描線がしっかりしており、彩色も豊かで、とりわけ紋様——服の細部、ハンカチ、肘かけ等々の——が細密に描かれている。各人物には注を有する。左から記せば、次の通りである。[]内はロシア人名の現代綴りである^(注3)。

下官

| | | |
|--------|-----------------------------|-----------------------------|
| 役人 | アタムキシロエチ ^エ ラクスマン | [Адам Кириллович Лаксман] |
| 通詞 | イコルイハノイチタス | [Егор Иванович Туголуков] |
| 商人 | ウラシンキホロイチハビコ | [Влас Никифорович Бабилов] |
| 水道先案内人 | シャバリン | [Дмитрий Яковлевич Шабарин] |
| 瓢流人子供 | ヲレキセイ | [Алекей Васильевич Ловцов] |
| 大船頭 | ワシリイチロフシャウ | [Василий Федорович Ловцов] |
| 代官子供 | マタルシ | |
| 下官 | | |

これらの注は人名が主だが、〈マタルシ〉は普通名詞матрос [水夫]で、〈ヲホツカ郡官の子〉である〈ワシレイ・イワノウイチ・コーハ [Василий Иванович Кох]〉をさす。絵の中で興味をひかれるのは、ロシア風の什器類もさりながら、その中であって3面の扇が描かれていること、さらにロシア文字様のものが扇中に書き込まれている点、第8番目の人物がペンで今まさに書き込もうとしている様子を描いていることである。日本人が記念品としてロシア人にこうしたものを求めたことが知られているから、これを示すものであろう。後に光太夫が扇面に露字を認めることを多くなすが、同様の行為であろう。さらに第8の人物脇には和書がふた山置かれてあり、綴じ糸や題籤も描かれている。日本側の贈り物でもあろうか。

本絵馬の奉納主・大澤富右衛門は、当時付近の富豪であり、南部藩に出入りしていた人物らしいが、未詳である^(注4)。また何故の奉納であったかも不明である。

絵馬の裏面には〈奉納〉〈叶〉の大書があり、以上から本絵馬は寛政5年・松前において光太夫らを伴い来たったロシア人を描いたもの、あるいはその写し、と考えられ、松平定信旧蔵図とともに語られるべきネムロ越冬図の一図であろう。

第2の資料『亞魯齊亞通辭日記』は大阪・愛日文庫所蔵の一本である。本書については調査と検討

が不十分ゆえ、ここでは概要を述べるにとどめる。本書は『寛政四子年 […] 白子村神昌丸船頭幸太夫夫初魯西亞國註飄流之記』(表紙直書き。…は破れ部分)と題する6冊からなる写本の1冊中に含まれる。いわば中表紙に、上記表題が中央に大書され、右に〈寛政七年〉、左に〈卯 十二月日〉とある。この年紀は本書の成立時を考える上で重要で、後述の内閣文庫本などにはかかる年紀がみられない。にわかに書写の年か成立の年かを決定できないが、他部分の表紙の書き方からすると成立年のようにとれる。大きさは縦22.5cm、横17.2cm。のどの部分、紙の継ぎ目に1cm角の山片洋印(註5)を2顆捺す。表紙を除き、墨付き15葉。毎半葉5行の漢字・仮名まじり日本語を大書し、その右傍に片仮名でロシア語を示す節用集に似せた独特の方式をとる。単語のみならず文をなすものもあるが、いずれも1項とすれば、全247。分類は首と末をのぞき、部門別をとる。すなわち、〈天地・乾坤・時候・支躰・曆数・衣服・食物・器財・草木・言語〉に分かつ。〈言語〉にもっとも多く収録語を有する。本書末に〈幸太夫・小市・磯吉〉と〈于寛政四年子〉の文字がみえるから、ラクスマン来航時に成立した主に光太夫のロシア語彙集とみてよからうと考える。

本書は内閣文庫所蔵『亜魯齊人來朝記』中の〈亞魯齊亞通辭日記〉とほぼ同一とみてよからう。ただし細部にあっては異なりがみられ、たとえば首の部門別は愛日本同様標示がないものの、それ以下では次のような分類をとる。又、毎半葉10行どりで項目を掲げる。

天地之部・乾坤之部・時候・支体・人倫・曆数・衣服・食物・草木・禽獸・言葉・言語・船具・萬具

基本的には同じと認めてよいが、内閣本では部門分けが細分化されている。さらに目立つことは、増補しようとしたのか日本語表記のみで右傍のロシア語を欠くものが存在することである。

愛日文庫の『飄流之記』は表題下に〈思貽堂圖書記〉の朱印を捺し、左に〈思貽堂藏〉の墨書を有する。この書は種々の資料を各所より入手して光太夫の漂流記として編集し6冊にまとめたもので、手もそれぞれ別々と考えられるとのことである(註6)。とはいえ、『亞魯齊亞通辭日記』は、ラクスマン来航後の早い寛政7年頃編集された、節用集風のロシア語彙集であることは、以上から了解されるであろう。

第3として、鈴鹿市所蔵「大黒屋光太夫・磯吉画幅」につき略記する。紙本彩色1軸。大きさは本紙縦103cm、横50.5cm。全体として縦191cm、横56cm。新出資料であり、2008年京都の某所より購入したという。ほぼ等身体の一軸で、『奇観録』に掲げる〈尾張 恒川熊謹寫〉の光太夫・磯吉の並んだ姿絵に構図は似せるものの、光太夫が正面を向き、磯吉も左顔をこちらに向けている。又、彩色も割合鮮かである。光太夫は帰国直前の姿がゲッチンゲン大学図書館所蔵・アッシュコレクション中のジーファースのサイン帳に彼により描かれ、さらに帰国直後のそれは、天理大学図書館所蔵・松平定信旧蔵「根室越冬室内図」中にも描かれ、世に知られるところである。一方磯吉は上記『奇観録』は大方の写本においても後姿で知られるが、後年の姿絵は単身で『魯西亞國漂船聞書』に描かれている。しかしいずれも書冊等のなかにあるからサイズは小さく、本画幅のごとく大きいものは珍しい。大きさはおそらく現在の状態より幅も高さもあった筈で、改装の折にやや縮められたことが、画幅中に残る空間から察することができる。紙の焼け具合から、長期にわたって実際に掛けられていたと専

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

門家はみている^(註7)。金のメダルをかけた光太夫の上着は紺色，毛織の帽子を左手にもった磯吉の上着は赤で彩られて，互いをきわだたせている。残念ながら制作者・制作年は未詳。粉本は『奇観録』の二人の姿絵と思われるが，確証はない。描き方から，それなりの絵師によって拡大されて制作されたと推量できるが，恐らくは現状よりも上下・左右ともに料紙は大きかったか，あるいは文字なども書かれてあったものが切りとられて改装されたのかも知れないが，未詳というしかない。

2 小市に関する資料

小市に関する資料として旧市立函館図書館所蔵・現函館市中央図書館所蔵『伊勢國南若松村漂民小市將來圖』をとりあげたい。この図は昭和14年（1939），館長の岡田健藏によって入手された。亀井高孝も注目していた資料である^(註8)。本図は破損と変色が見られるが，購入後にか，折本に仕立て直され，岡田により〈小市所持之品〉一覧が首に，〈跋〉が末にそれぞれ見開き1葉に認められ付加されている。後者は〔昭和十五年二月十一日〕と年紀を有する。書誌は次の通りである。

函架番号 K299・イセ・6003。改装折本1冊。縦29.4cm，横20.6cm前後。全23葉，うち一覧，跋各1葉，原葉21葉。

全体として，岡田跋文の言うごとく，文字等は古いもの。しかし損傷が多く，特に現行折本でいえば，のどの上・下端，ことに後者において甚しく，時に図および文字にかかる。むれも多く虫損もある。彩色は割合よし。むれにより朱の染みあり。文字・紋様の写し等，やや不分明ながら，努力して写している（例，透かし，銭）。末の何葉かは，下書きの描線を残す。各図は朱筆にて品名・注を付記するが，何葉かはこれを欠く。また原葉首に朱筆の加えあり。改装時に原本の上・下を切断した様子が見られる。

原葉首の見ひらきは次のようにある。[……]は破損を示す。

寛政六申寅臘月北勢川曲郡

南若松 [……] (2ウ)

勢州白子神昌丸船十六人乗ウワ乗徳田村作 [……] 十七人乗也去^{南若松村}天明二年寅十二月十三日夜
 夕漂流 [……] 魯西亞國ニ至リ十二人病死ス残る五人也水主新藏水主 [……] 庄藏^{南若松村} 兩人



図2 鈴鹿市所蔵「大黒屋光太夫・磯吉画幅」
全体191×56cm

- ユヘ有テ(朱) 南若森村 同 同 ○ノ海上(朱)
- (朱) 彼國ニ止ル船頭幸太夫マカナヒ小市カシキ磯吉」右三人帰朝○(朱) 蝦夷地ニテ小市病死ス
- 日本江着岸三日マヘ也
- (朱) 依之彼国々所持之」衣類諸道具小市後家江被下置品々四拾七品左之通」(3オ)

次に原図を全品につき見開きで掲げる(図3~22)。図はすべて彩色されている。

本図帳には、上述のごとく、岡田による〈小市所持之品〉として〈メ四十七品〉の品名と数量が一覧表として添えられているが、また各図に朱書きで品名と注を有するが、ここでは別の資料に言及し、かつこれを引用し、所掲各図の理解の手懸りとしたい。

鈴鹿市所蔵「阿羅娑國衣服器物目録」がその資料である。寛政11年(1799)京都伏見桃山において小市の遺品展が行なわれた折の〈目録〉一枚刷りを墨で写したものである。小市の後家けんに遺品が

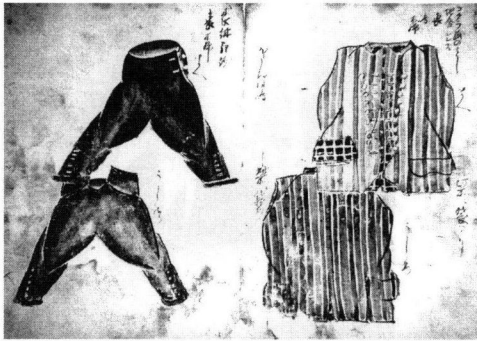


図3 『漂民小市将来圖』原図1 29.4×20.6cm

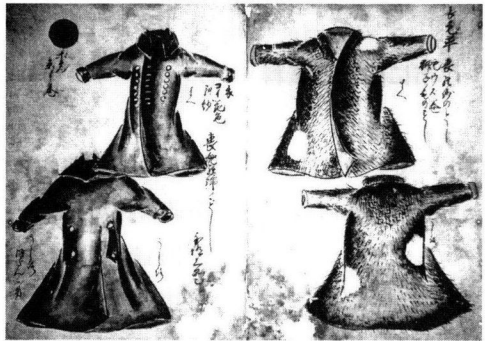


図4 同2

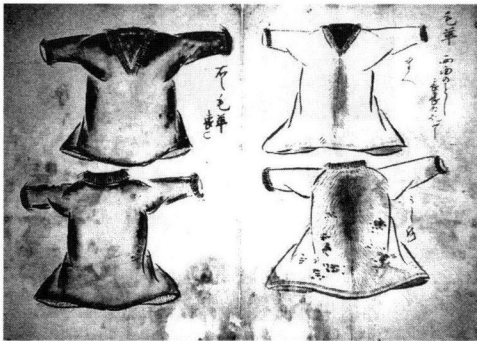


図5 同3

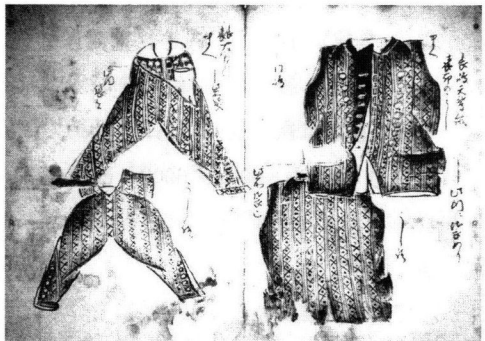


図6 同4

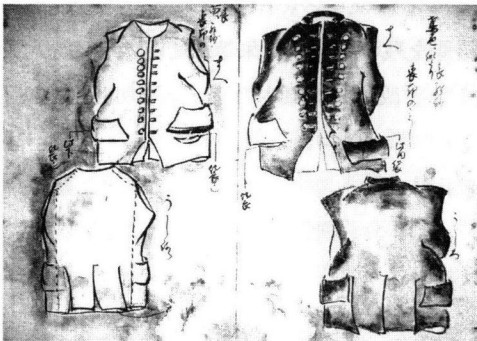


図7 同5

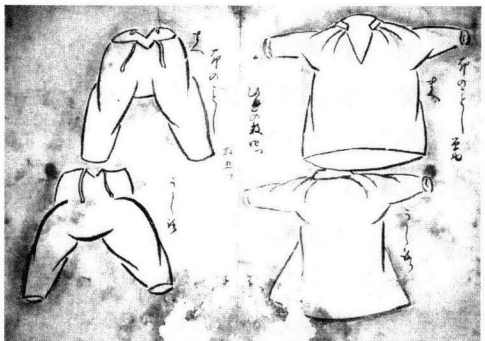


図8 同6

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

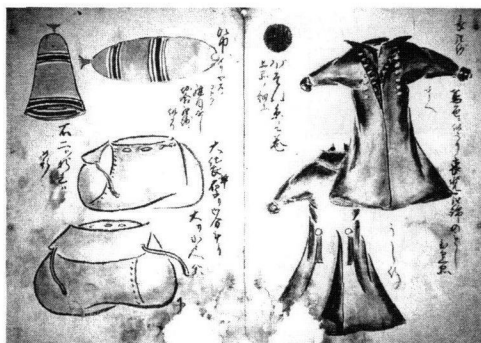


図9 同7



図10 同8

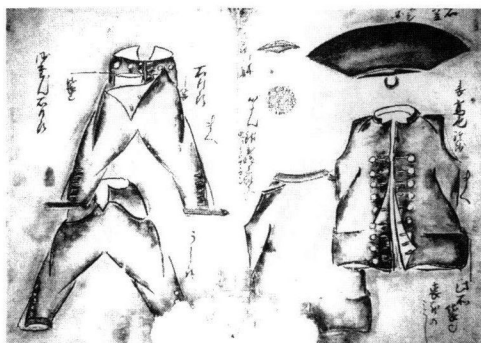


図11 同9

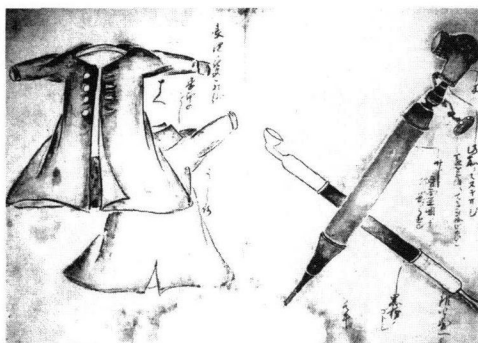


図12 同10

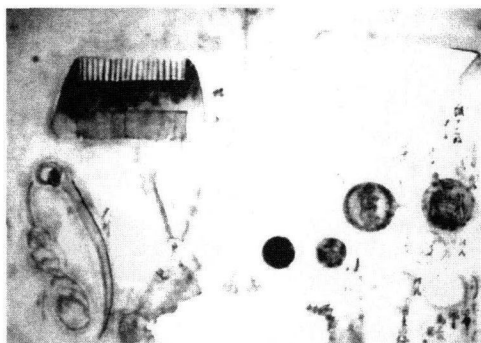


図13 同11

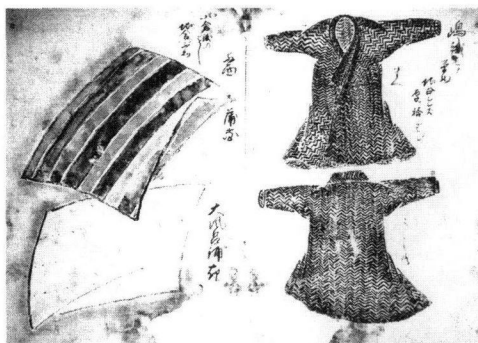


図14 同12

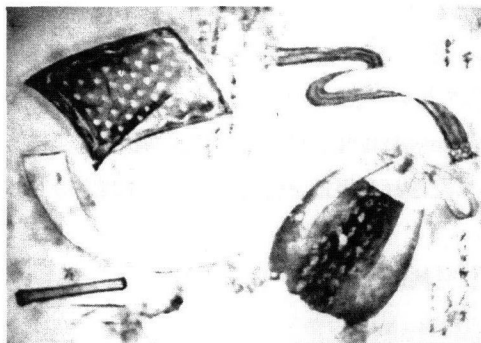


図15 同13

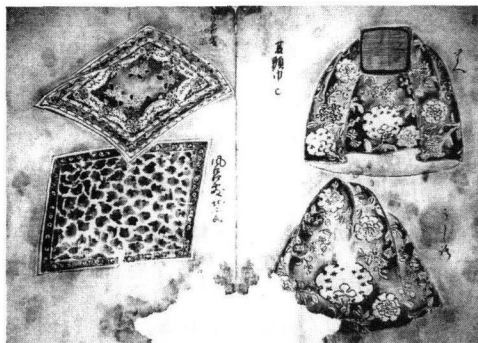


図16 同14

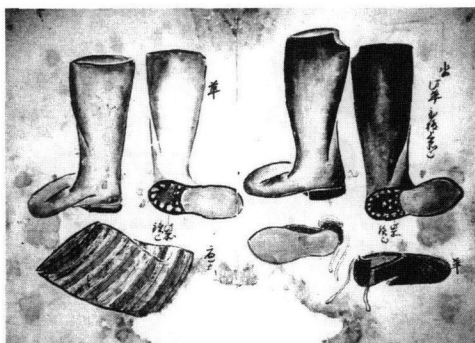


図17 同15

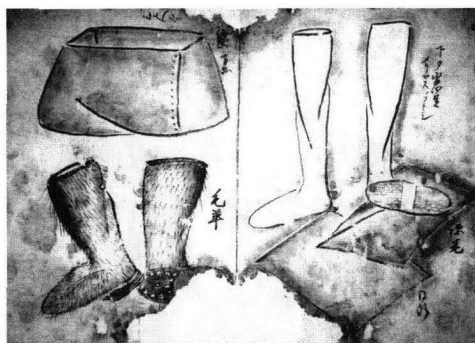


図18 同16

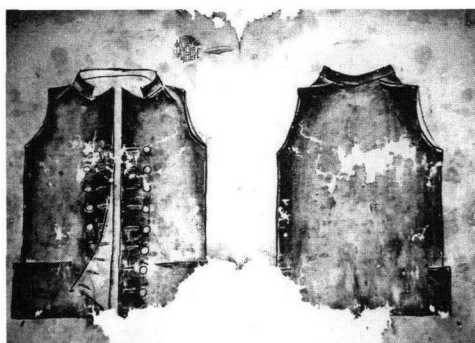


図19 同17

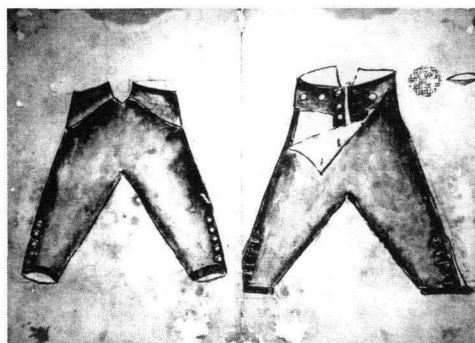


図20 同18

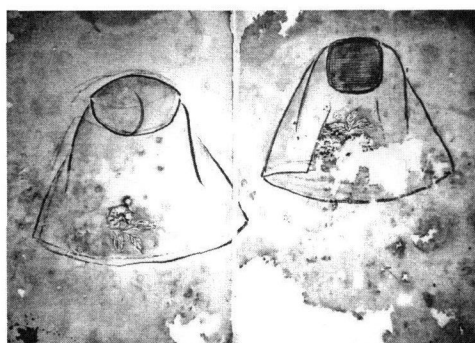


図21 同19

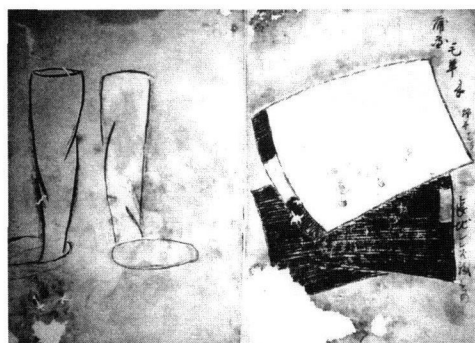


図22 同20

一旦下げ渡されたのが寛政6年（1794）9月であった。実際にその一部が現在鈴鹿市に伝存する^{（注9）}。

本資料は、薄様紙2枚を中央で貼り合わせて1紙として用い、その大きさは縦33cm、横51.2cm前後。しき写しとみられ、框郭も写しとっている。框郭内28.6cm×44.3cm。標題は1段ぶち抜きであるが、品名の欄は上下2段である。本文引用の前に、框郭外に記された墨書を引用する。第1は右上に次のような2行墨書がある。（原本縦書き）。

寛政十一年己未三月」來三月十三日ヨリ四月二日迄伏見桃山ニおいて一覽也
第2は左下に次の4行墨書がある。第4行細字。

（原本木版刷 京都島原角屋ノ文庫ニ在リ）昭和拾年六月七日」寄贈 伊勢飯南郡財和村」山

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

崎徳吉」(コレニ関スル詳細ハ雑誌「傳記」昭和十一年四月号拙稿参照アリタシ)

これらの墨書き本資料の性格が分かるであろう。原本木版刷りは今日京都島原角屋には伝存しないとのこと。ただし木版刷りは某所に現存するが非公開らしい。山崎徳吉の寄贈先は小市の菩提寺である宝祥寺であり、現在も同寺の封筒に収められ保存されている。

本文の引用に移る。標題は以下の通りだが、その上下に各3行の細字注を有する。

日本ヨリ海上」壹万八千五百里」北東之國也 おろしやくいふくきふつもくろく 阿羅婆國衣服器物目錄 勢州龜山石川日向守様御領分」伊勢川曲郡
白子浦若松村」船頭小市異國將來之品々也

上段と下段は次の通り。下段末の6行はさらに2段に書く。いずれも注は細字で引用する。

船頭小市守本尊

| | |
|--|---------------------|
| 一正觀世音菩薩 | 但シ御長サ一寸八分」黄金佛也 |
| 一萌葱羅沙装束 <small>モエキラシヤ</small> | 但シ裏ハ」唐獅子毛附革也 |
| 一花色ラカウ雨合羽 <small>アマカツハ</small> | 但シ能ク水はちく事妙也 |
| 一鶯色羅沙装束 <small>トビイロラシヤ</small> | 但シ牡丹メ銀也 |
| 一同股引 <small>モヒキ</small> | 但シ牡丹メ同断 |
| 一黒羅沙礼服 | 但シ裏ハ花色ノイギリス |
| 一花色羅沙礼服 | 但シ裏ハ同断也 |
| 一天竺インデン毛附装束 <small>(ママ)</small> | 但シ釣鐘仕立ト云」裾縁ハラツコノ革也 |
| 一毛附羊ノ革蒲團 <small>トン</small> | 但シ裏ハ一幅物ニテ」アメリカ国ノ毛織也 |
| 一ヲロハ嶋蒲團 <small>トン</small> | 但綿なし |
| 一黒チヨロケン笠 | 但シ晴雨共ニ用ユ |
| 一鶯色羅沙手袋 <small>トビイロ テフクロ</small> | 但シ裏ハ天竺ラツコ革也 |
| 一ヒンヤル嶋胴着 <small>ドウギ</small> | 但シ裏白布 |
| 一同股引 | 但シ裏ハ同断也 |
| 一黒鶯羅沙胴着 <small>クロトビラシヤドウギ</small> | 但シ裏ハ右同断 |
| 一白羅沙胴着 | 同 |
| 一ヲロハ嶋胴着 | 同 |
| 一紺羅沙股引 | 同 |
| 一白毛織股引 | 四ツ |
| 一ヲロシヤ國藤織單物 <small>フシヲリヒトエモノ</small> | |
| 一同毛織ノ帯 | 但シひねり織なり |
| 一同白布繻伴 <small>シュバン</small> | 五ツ但シ毛織なり |
| 一同メリヤス足袋 <small>タビ</small> | 三足 |
| 一ぬき出し頭巾 <small>ツケン</small> | 但シ白毛織なり |
| 一鬼サラサ夏頭巾 <small>ナツツケン</small> | 但シ面ノ処ニ網あり |

ヲロシヤ國ハ夏毒虫多キ処故个様なる」頭巾をかふるといふ」(上段)

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 一ララシヤ國銀錢 | 但シ毫文錢なり |
| 一同銅錢 | 但シ大錢ハ金一兩ニ遣」小錢ハ金一分ニ遣 |
| 一南蠻鏡髭分 <small>ナンバンテツヒゴツク</small> | 但シ食事ニ持 道く也 |
| 一同庖丁 | 但シ柄ハ白檀なり |
| 一ラロシヤ國煙管 <small>キセル</small> | 但シ雁首ハ水牛」吸口ハ犀角也 |
| 一同サハリ煙管 <small>キセル</small> | 但シ何レも羅ハ葭竹也 |
| 一ハルシヤ革ノ沓 <small>カワ クツ</small> | 沓足 |
| 一サントメ革ノ沓 | 沓足 |
| 一アツキ革ノ沓 | 沓足 |
| 一水豹革ノ沓 <small>スイヒヤウ</small> | 沓足 |
| 一紅毛サラサ風呂敷 <small>ワランタ フロシキ</small> | 沓ッ |
| 一ジヤガタラ染風呂敷 | 沓ッ |
| 一ララシヤ染風呂敷 | 沓ッ |
| 一ララシヤ布大風呂敷 | 沓ッ |
| 一ムスコヒヤ革大袋 | 但シ天竺大象ノ革」紐附テあり |
| 一天竺アザラシ革大小着 | 沓ッ |
| 一ララシヤ嶋布袋 | 沓ッ |
| 一ララシヤ國飯椀 <small>メシワ</small> | 但シ赤銅なり |
| 一同飯喰ヒ <small>メシクヒサジ</small> | 一同縫針 |
| 一同兩齒櫛 <small>リヤウ ハクシ</small> | 一同紅毛はさみ |
| 一同毛織煙管筒 <small>ケツリキセルツハ</small> | 一同サハリこはぜ |
| 一同針入 但シ」葭竹也 | 一同衣装縫糸 |
| 一同革縫糸 <small>カハヌイ</small> | 一同紙 但シ内ニ」文字あり |

天明三卯歳七月漂流致ララシヤ國に」丸八ヶ年住居仕寛政五丑歳日本江帰國」致候但シ小市ハ蝦夷ニテ丑四月二日病死ス」
行年四十二才法名釋轉道友信士」宿坊勢州白子南若南村法聖寺且家

末の注は全5行。語に注を要するものがあるが今は省略する。

ここで史実を確認しておく。小市の病死は〈丑年四月二日〉すなわち寛政5年（1793）4月2日。ラクスマン『日本來航日誌』^(注10)では露曆〔1793年〕4月30日、午後2時すぎ壊血病のために死亡とある。同年6月24日（露曆7月20日）光太夫・磯吉が日本側に引き渡される。小品の遺品は寛政6年（1794）9月に郷里若松に送られ、一旦は後家のけんに渡され、後は大庄屋加藤要助が保管。遺品は計59点、うち外国のものは47点。後者は元來49点あったが2点は召し上げとなった。

これらの遺品は、多くの場合小市への追善供養の名目で、一般公開が許された。初回の展示は、同年9月18日から22日、延長されて23・24日と南若松村宝祥寺（法聖寺）にて追善供養が催された折であった。遺品の管理は大庄屋があたり、口銭をとって貸出しもその後行なわれたようである。保管場所は宝祥寺内であったらしい^(注11)。

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

本稿で問題とする函館市中央図書館所蔵図帳は、この初回展示と同年の12月に描れたとみられる。年紀未詳の『魯西亜国漂船聞書』巻之一中にも小市遺品図を載せるが、その編者の友人秦某^(註12)が勢州遊観の折、小市の家に立ち寄り乞うて遺品を見かつ図したものを、編者が模写したものという。その時期がいつかは明示されぬが、寛政6年に程遠からぬ頃であろう。遺品名一覧は、初回覧示の折のものとして〈寛政六_寅極月〉の年紀を有する『松汀木翁艸稿』^(註13)中にも存する。(ただしこの書では遺品下げ渡しを8月、追善供養ならびに展示を〈八月十八日夕一七日の間〉と記す)。もとより、上に引用した木版写しとは順序等も異なる。

『阿羅娑國衣服器物目録』は『魯齊亞国睡夢談』巻之三に掲げるものと同一である。仮名遣に異なるもの、また品名〈革縫糸〉を後者が欠くが、同順で列挙され記事も同一である。ただし両者の関係は未詳とするしかない。

小市の遺品の展示でよく知られているのは、寛政7年(1795)名古屋で催されたものである。8月9日から29日まで21日間、七寺境内中の一乗院で開催されたという。その様子と口上の有様さらに品々の細見図は『猿猴莽合集六編』(紙の博物館所蔵^(註14))に詳述されている。そこに示された図はもとより、口上は遺品の形状・用途の理解に助けとなる。例えば〈南蠻鍔髭分〉(図13参照)は、食事を持つ道具とあるが(『睡夢談』注は〈但シ食事=用道具なり〉)、『合集』には説明人が左手にこの道具をもち、鼻の下にかざしている図の上方の絵解きに次のようにあって、疑問が氷解する。(ルビは省略し句点は〈、〉で引用する。)

又これハ髭上と申まして、あの方でハ、下人ハひげをそります事になりませぬゆへ、食事に髭が
じやまになりますから、これで、なごう髭を上て置てたべますと申ます(7才)

又函館の図帳原図8(図10参照)に描く帽子の鉄製前立は、鈴鹿市に伝存する遺品中にみとめられるが、『合集』には図の脇に次のようにあって納得がいく。

笠に立る印 あかゝねにて作りたるものにて此印を以て貴賤上下を見分る為なる由(12ウ)

余談となるが『合集』中の注意点に言及しておく。〈魯西亜國女帝之眞筆之写〉と〈光太夫手跡の掛物〉は小市の遺品ではない。前者は眉つばである。写しは天地逆で全5行。判読すれば次のようである。

〈Въ Санктъ петербургѣ/Графъ Аполлосъ аполлосовичъ Мусинъ-Пушкинъ/Генераль М аіоръ/Степанъ Борисовичъ Струговщковъ Подполковникъ〉[サンクト・ペテルブルクで。アポロース・アポロソヴィチ・ムシン=プーシキン伯爵、4等官。ステパン・ボリーソヴィチ・ストルゴフシチコフ、7等官。]。これら人名は、地名を除けば、『魯西亜文字集』の記事のひとつに一致する(23ウ)。同書に關係する資料か。後者は判読すれば〈иманаыта/коева. ташы_/кані хототогы_/сѣ〉であり、〈今啼た聲はたしかに時鳥〉と注する。もうひとつ留意すべき箇所は、紙に関する項である。紙は唐紙に似ず厚紙に類すること、白紙と青紙の2種であること。すかしを有すること、しかもそれが種々あることを述べる。15ウから17オにかけて紙を模写し、実はすかしも粗雑ながらも写しとっている。第1の紙(15ウ~16オ)を模写するものは天地および表裏ともに逆で、正してみれば右側に鹿に王冠の紋章、左側に〈РФСЯ〉、中央下に〈178?〉とみえる。ただし紋章中の鹿は不明瞭。第2の紙(16ウ~17オ)のそれも天地・表裏ともに逆。正してみれば、左側に〈1789〉

同下に〈BCM〉、右側上に〈1789〉、同下に〈CΦP〉、中央に弓に丸をつけた紋章を配する。前者はUchastkina^(註15)の783図、後者は77図に似る。よって前者は178〔4〕年、ヤロスラヴリのS. Yakovlevの工場製であり、後者は1789年、ヴァトカのF. Ryazantsevの工場製ということになる。なお銀貨とともに光太夫により寄進されたと伝えられるいわゆる〈箴言〉の用紙は空色で、年紀未詳だが〈PRO PATRIA〉の紋章を有する。おそらくロシア製のプロ・パトリア紙であろう^(註16)。

小市の遺品展示は何度となく行なわれたものごとく、口銭をとっての貸し出しをめぐり、小市後家の経済状況や村役人らの思惑などがからみ、芳しからぬ一面もあったようである。『松汀木翁艸稿』および『極珍書』^(註17)中にはその感想が綴られている。名古屋の展示はまるで寺社の開帳と同様の人気であったといい、香師が活躍する興業と化し、反面珍しい異国文化の紹介として啓蒙的役割をになっていたことも否定できない。

函館の『小市将来圖』は『北槎聞略』附図とは描法・彩色の点で劣るといわざるをえぬものの、後者に含まれぬ図を含んでいる点に特色がある。例えば櫛・鉢・髻あげ・帽子前立等であり、これらはより庶民的な品といえ、『北槎聞略』附図を補うものといえよう。『小市将来圖』はまた『魯西亜国漂船聞書』巻之一に載せる図とも比較されるべきである。後者にはさらに錠・本・ブラシ・ロシア女性の髪の毛等が描かれる。又、『猿猴莽合集六編』の図とも比較対照するべきで、得ることが多いことはすでに記した。『小市将来圖』は小市の郷里において寛政6年12月に現地で制作された点に最大の価値があるといえよう。

蛇足となるが、小市遺品一覧は『歴国記』（原本逸佚。明治45年謄写京都大学所蔵）中に引用される〈漂流人小市所持の品〉と題して存する。『松汀木翁艸稿』中に引くものは同一とみてよい。いわゆる〈光太夫ら帰郷文書〉（鈴鹿市所蔵。25件34点^(註18)）には小市遺品をめぐる諸事の文書が写されて残っていることは言うまでもない。

3 磯吉に関する資料

磯吉は、寛政10年（1718）許しを得て暫時帰郷がかなった。12月18日から翌年1月17日まで30日間の滞在という。この間、土地の心海寺9代目住職実静が磯吉の聞き書きを行ない、『極珍書』なる一書（以下Gと略称）をなした。これには芙蓉老なる人物^(註19)も関与したと思われるが、それはともかく、この書に密接にかかわると考える『魯西亜詞記』なる一本（以下Rと略称）が鈴鹿に伝存する。Rはその名が示す通り、和魯語彙集だが、その前部に漂流の概要を付す。結論から先に述べれば、RはGの核となった資料であり、漂流譚も語彙集も磯吉の直話によって増補拡大されたものと筆者は推定する。さらにRは、光太夫の語彙集と考えられる田辺安蔵編『魯西亜語類』^(註20)および桂川甫周編『北槎聞略』巻之十一〈言語〉所載のロシア語とはある種別の系統に連なる語彙集ではないかとも考へる。さらに言えば、Rには編者あるいは筆記者名が書かれていないが、少なくとも磯吉の所持したものが伝存したのではないかとも疑われる。よって、磯吉にかかわる資料とみて、以下Rを問題とした

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

Rは、表紙に直書きで〈魯西亜詞記〉(原本縦書き、以下横書きに改めて引用する)とあるが、内題は〈漂流始終_{并里数}」_{附魯西亜國詞大畧}〉、さらに語彙集部分首に〈魯西亜國通辞〉の標題を有する。〈漂流始終〉は2葉にわたり、天明2年(1782)の白子出帆から漂流、ロシア滞在、寛政4年(1792)ネムロ入津、翌年ハコダテ入津までを略記する。語彙集部分は全14葉。いわゆるひとつ書きの方式をとり、日本語(漢字・平仮名表記)を見出し語として、その下に片仮名書きのロシア語を掲げる。今これを1項と数えれば、全250項。(これに対しGは417項)。語彙集の末にはさらに〈計〉の標題をもつ1葉があり、ここではアラビア数字と、その半数に片仮名書きロシア語を付す。Rの書誌的な事柄は次の通りである。鈴鹿市所蔵。袋綴じ1冊。縦12.2、横17.3cm前後。表紙を除き本之17葉。表紙左に〈魯西亜詞記〉と直書き墨書。裏表紙に墨印2ないし3が捺されており、その下に所有者名とおぼしき墨書、裏表紙ウにはロシア文字(もどき)とその読みあり。黒印は丸印で、〈勢州」木屋」若松〉^(注21)のようにかすかに読める。(ともに下の写真参照)。

次にRの全巻を写真で掲げる。(翻刻はすでに完成しているが、紙幅の関係上から、さらにあまり知られていない資料であることから方針を変更して図23以下に写真を掲げる。^(注22))

次に若干の考察を加えたい。まず指摘すべきは登録語数の大小だが(上述)、ついで言うべきは分類の仕方である。Gが〈乾坤・器財・支体・生植・気形・数量・言語雑〉の節用集的な分類の〈門〉下に各項を収めるのに対し、Rでは一部は分類別(しかも部と名称を改める)、一部は頭字のみいろは順の二方法をとり、しかも不徹底である。前者も3ウ末に〈支体部〉と標示をみるばかりである。後者については6オの8行目から16オ・3行目まで順に〈い・ろ・は・ほ・と・ち・り・る・お・わ・か・よ・た・れ・つ・ね・な・む・う・の・く・や・ま・け・ふ・こ・て・あ・さ・き・め・ゑ・せ・す〉を頭字にもつ語が、清濁にかかわらず収められている(標字なし。又、帰属の乱れあり)。RがGと密接な関係を有することは、Rの支体部の語彙の配列順を一見すれば、ただちに了解できよう。Rの〈髪〉から〈起ル事〉(4オ～5オ)は、GにおいてRの〈眉〉の後にRの支体部直前の2語〈男・女〉をはさみ、ついでRの〈陰莖・開〉を逆の順にするほか、他はすべて同順である。なお、見出し語の表記およびロシア語片仮名表記の清濁の有無については随所で小異を有する。例 R〈眉〉:G〈眉毛〉/R〈足ノキ〉:G〈ノギ〉。字形の相似による片仮名の誤写と考えられるものも、これまた散見する。

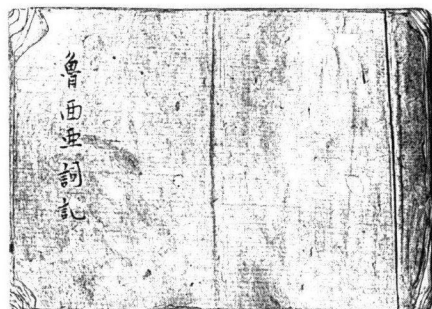


図23 『魯西亜詞記』表紙 12.2×17.3cm

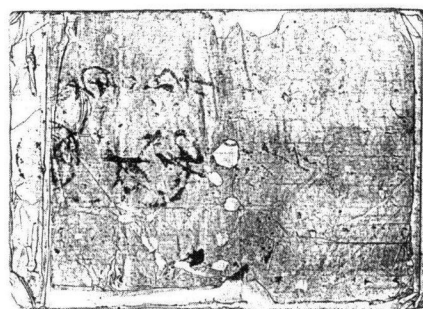
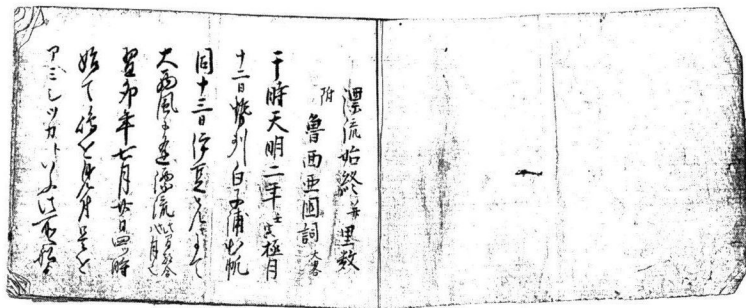
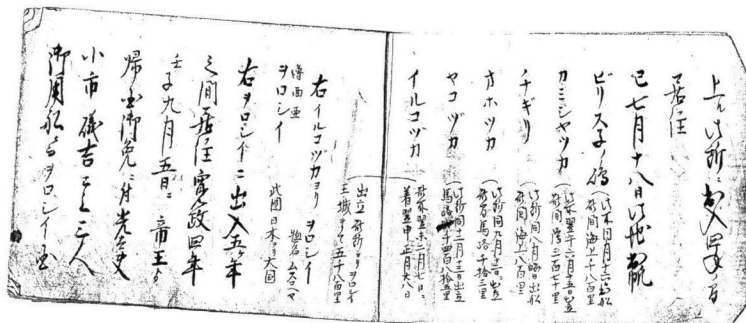


図24 同裏表紙



(1才)

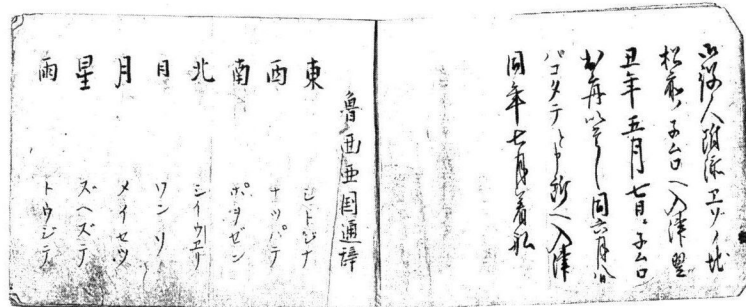
図25 同



(2才)

(1ウ)

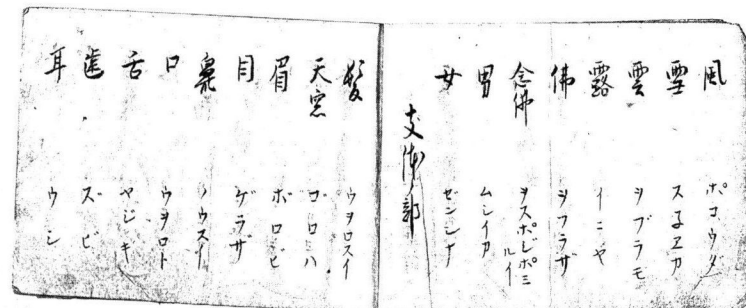
図26 同



(3才)

(2ウ)

図27 同

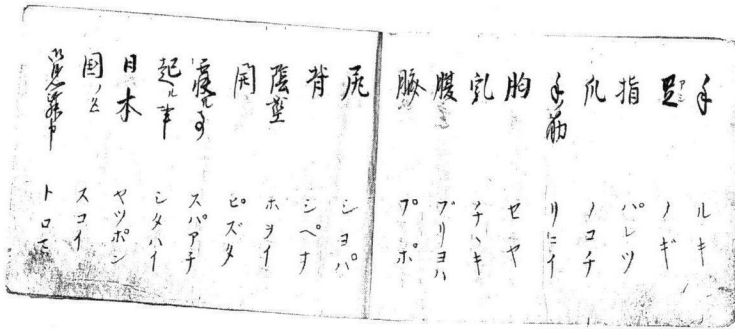


(4才)

(3ウ)

図28 同

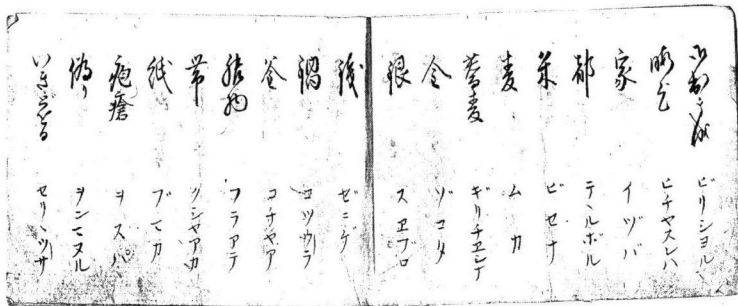
大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究



(5オ)

図29 同

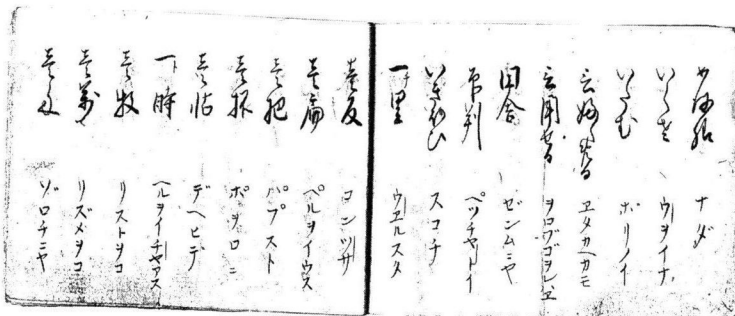
(4ウ)



(6オ)

図30 同

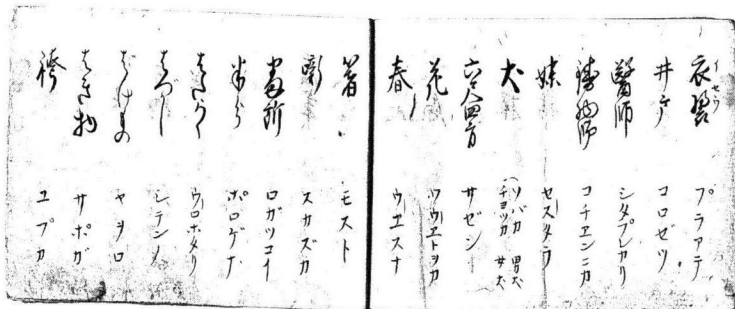
(5ウ)



(7オ)

図31 同

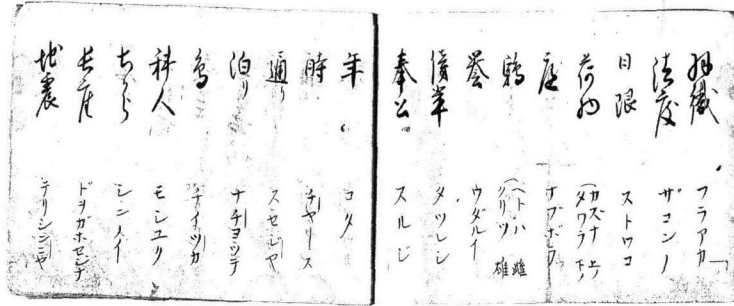
(6ウ)



(8オ)

図32 同

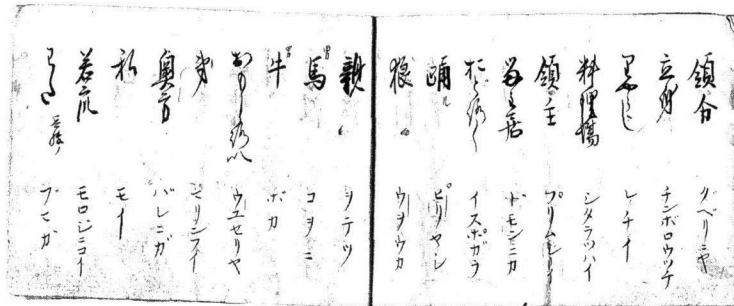
(7ウ)



(9オ)

(8ウ)

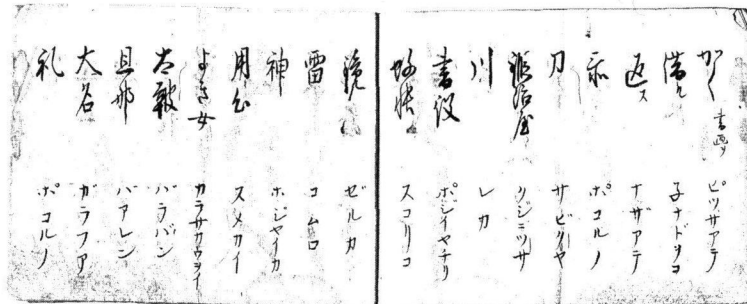
図33 同



(10オ)

(9ウ)

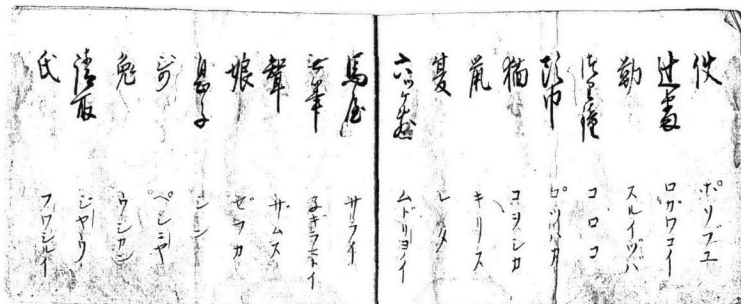
図34 同



(11オ)

(10ウ)

図35 同

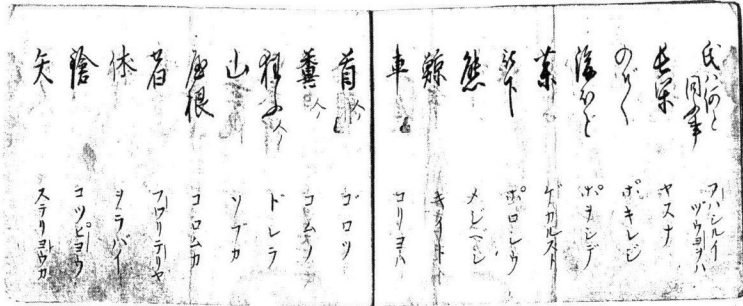


(12オ)

(11ウ)

図36 同

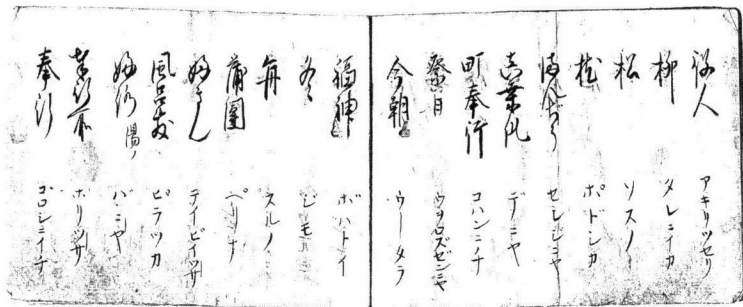
大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究



(13オ)

(12ウ)

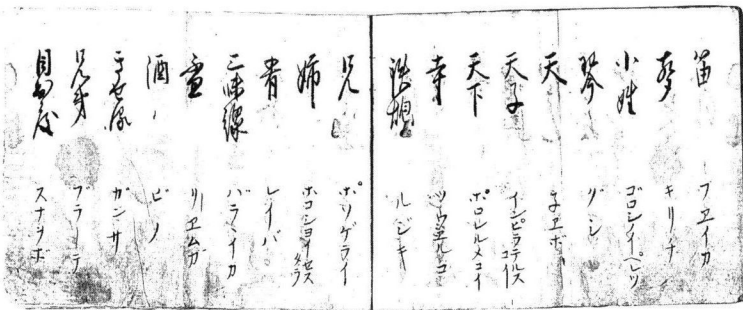
図37 同



(14オ)

(13ウ)

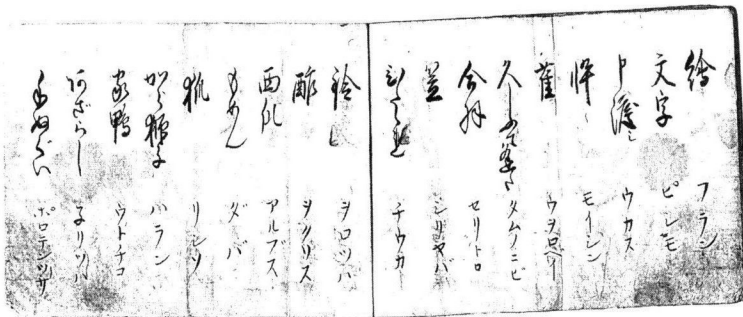
図38 同



(15オ)

(14ウ)

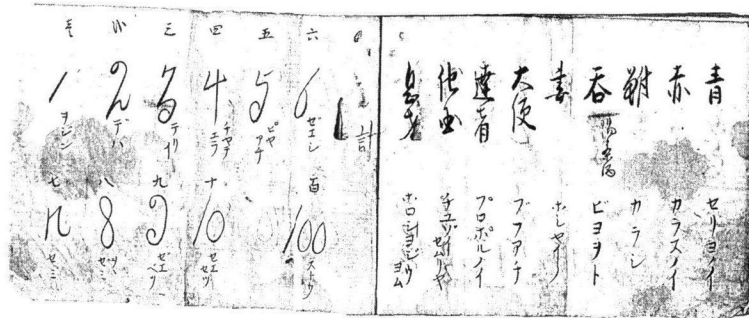
図39 同



(16オ)

(15ウ)

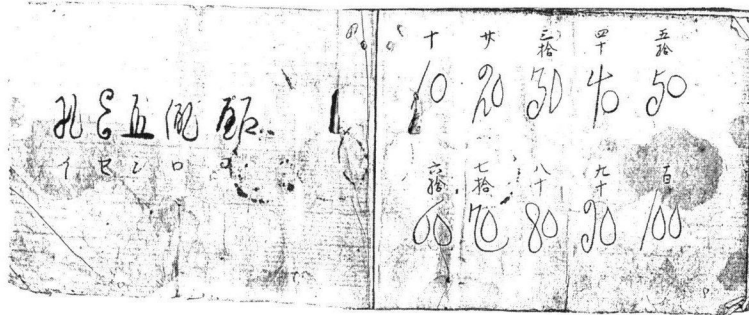
図40 同



(17オ)

(16ウ)

図41 同



裏表紙ウ

(17ウ)

図42 同

ロシア語語彙の表記において、Rに特徴的なのは〈いきどをる セリ、ツサ／鍛冶屋 クジニツサ／ふきん テイピイツサ／奉行所 ホリツサ／手ぬぐい ポロテンツサ〉の各項に見られる〈ツサ〉の表記である。ロシア文字でи（あるいはこれに相当する綴り）で示される破擦音を表わそうとする苦心の表記法と考えられるが、使用例は少ない。ちなみに今、上記5語につき、Gおよび『魯西亜語類』（RGと略称、寛政5年（1793）頃？）、『北槎聞略』（H、寛政6年）、『魯西亜辨語』（B、寛政4、5年頃？）と見出し語・ロシア語片仮名書きを比較してみると次表のようになる。漢字の読みは（ ）に移し、△は不在を示す。

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

| R | G ^(註23) | RG | H | B (*は〈裏之巻〉にあることを示す) | Bの推定ロシア語 ^(註24) |
|----------------|--|--------------|--|---|---------------------------|
| いきどをる セリ、ツサ | 憤 (イキトオル) セリリツサ 嘔 (イカル) セリウトイ | 腹を立 セルジウシ | セルリイストイ 怒 (いかる) スリミイトイ 怒 (いかり)を發 (おこす) | セリ、ツア 憤 (いきどうる, いかる) *セリ、ツサ 憤又怒ニ用ユ | сердиться |
| 鍛冶屋 クジニツサ | 鍛冶屋 クジニツサ | 鍛冶 ウエデル | クジニエーツ 鍛冶(かぢや) | *クジニエーツサ 鍛冶や | кузнец |
| ふきん テイベイツサ | △ | △ | △ | テリビイツア 布巾 (ふきん) *テリビイツサ 布巾 | тряпич |
| 奉行所 ホリツサ | 奉行所 ホリツサ 御番所 コリツサ | △ | ホリツ 圍圍(ろうや) | ホリツサ 官府 (ぶぎやうしよ) *ホリツサ 奉行所 *ホリツサ 御番所 | полиция |
| 手ぬぐい ポロテンツサ | △ | 手拭 プアト | バラテンツ 蔽膝 (ひさかけ) | ポロテンツサ 手拭 (てぬぐい) *ポロテンツサ 手拭 | полотенце |

この5語を見ただけでも見出し語およびロシア語片仮名書きの2点で、Rが(Gとはむろんだが)Bに近親性を有すること、RGやHとはやや離れている点分かるであろう。しかもBの内、和魯語彙集である〈裏之巻〉に近似するのである。実の処、他の語彙においても同様の近似性がRとBの間にはみられるが、ここでは紙幅の関係上割愛する。

今回、次に述べる事柄は十分に調査と検討ができなかったので、想像をまじえた略記にとどめたい。第1は、磯吉が光太夫とはやや異なった言語感覚を有していたのではないか。すなわち、滞露時年少であった磯吉は独自の「耳」を備えていた可能性がある。たとえば『魯西亞漂船聞書』(年紀未詳)巻之十に再掲された〈漂民御覽之記〉にあらわれるロシア語につき、磯吉はしばしばおのれの意見を具申していることなどが傍証として存しよう。今後、磯吉のロシア語をよく検討してみなければならぬ。

これに続くこととして、磯吉自身の語彙集が存在したのではないかという疑問が生じる。R、正しくはRの原本は、かかる語彙集の系列下にあるのではないか。これも今後の課題である。一方で、磯吉帰郷時に聞き書きされたGが、上述のごとくRに密接に関係する事実があるということは、Rは磯吉所持そのものか、あるいはその転写本ではなかったか、と考える。誤写の存在、清濁の異同等から考えあわせると、恐らく後者であろう。磯吉所持本が一方で、木屋某かその周辺の人物に書写され、他方で、これをもとにGの語彙集部分に採録され、かつ磯吉に実際に尋ねることにより増補され、かつ部門別に整理されたと筆者は考えるのである。Rの原本は上述のごとく、光太夫等帰朝時直後頃作成され、その語彙・表記の一部がBに流れ込んだ可能性がある。

R本体に戻る。Rの数字の表記・ロシア語はGの数量門に掲げるものと同じである。特に〈3・7・9〉の洋数字の書き方に注意。またRの裏表紙ウにみられるロシア文字は亀山市教育委員会蔵『漂

民台覧ノ記』、および鈴鹿市所蔵『松汀木翁艸稿』中〈考案〉に掲げるロシア文字と酷似する。磯吉の手とは別か。

なお、『松汀木翁艸稿』は全1冊、墨付30葉半。縦10cm、横17.3cm前後。〈小市後家〉の件を前半10丁に記し、その末に〈寛政六_寅極月「芙蓉館」木翁書〉とある。後半20葉半は首に〈考案 芙蓉館木翁稿〉、末に〈松汀木翁「艸稿」〉とあり朱印2顆を有する。その内容は前半への考察であり、その態度はGに通じるところがある。木翁なる人物はGにも「書」とあることから、漂民問題には大いに関心を有していた土地の有識者であったと推量される。ここでは木翁をGとRとの関連において取り上げたが、『艸稿』自体は寛政6年末に行なわれた小市遺品の下げ渡しとその展示にかかわる著作であり、かつ〈考案〉の参考となった資料は『台覧記』であることを断わっておく。

むすびとして

今回調査・検討した諸資料は、はからずも、光太夫ら帰朝時の寛政4年(1792)直後のものか、あるいはそれらに連なるものかであった。高良神社「異國人圖」および函館中央図書館所蔵『伊勢國南若松村漂民小市將來圖』は寛政6年成立、愛日文庫所蔵『亞魯齊亞通辭日記』は推定寛政7年成立、鈴鹿市所蔵「大黒屋光太夫・磯吉画幅」は寛政4年「ロシア人根室越冬室内図」に連なる。鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』も同時期の成立の可能性がある。いずれも小さいながらも『北槎聞略』本文・附図および周辺資料をさらに補う資料と言えよう。またわが国のロシア語学習・研究史に関心をもってきた筆者にとり、『魯西亜詞記』が『魯西亜辨語』と何らかの結びつきをもつのではないか、その成立に磯吉が関与しているのではないか、という感触を得たことは収穫であった。磯吉のロシア語につき、良く検討してみることが、次の課題として残るであろう。

【謝辞】 本稿をなすにあたり、次の諸機関の貴重書を閲覧させていただいた。

高良神社、函館市中央図書館、愛日文庫、鈴鹿市および大黒屋光太夫記念館、国立公文書館内閣文庫
また次の方々のご協力を得ました。

青森県五戸町教育委員会・村本恵一郎、五戸町・畑山春雄、柿本孝太郎；愛日教育会・丸山悦治、故中尾堅一郎、前早稲田大学教授・末中哲夫；鈴鹿市文化課・代田美里、芳田厚、前同教育委員会・辻 正、大黒屋光太夫顕彰会・山口俊彦、浜中克巳

写真および翻刻の掲載はそれぞれの所蔵機関の許可を得て、これを行なった。

さらに英文レジュメにつきProf. M. Petersenの校閲を得ました。ここに芳名を記し、感謝の意を表する次第です。

注

- 1) 社名・縁起については次を見よ。倉石村史編纂委員会『倉石村史』下巻(平成元年)、534ページ～。

大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究

- 2) 『北槎聞略』によれば、ロシア人12人を含む一行が松前に到着したのは20日未の刻。一行の歩行図は飛騨屋武川家文書中に伝わるものが有名だが、最近ロンドンで発見された図、鈴鹿市所蔵「漂流人帰国松前堅之図并異国人相彩図」も同種図。(後二者は写真による。原図は筆者未見。)
- 3) 中村喜和〈光太夫が作成したロシア人名簿〉(『大黒屋光太夫 史料集』第3巻), 亀井高孝・村山七郎『魯西亜文字集』(吉川弘文館, 昭和42年), 村山七郎(加藤肩吾著「魯西亜実記」(魯西亜紀聞)の文献学的研究) (『順天堂大学体育学部紀要』10号, 1967年12月)等を参照。
- 4) 五戸町教育委員会の村本恵一郎氏によると〈大澤富右衛門〉なる人物は戒名の点でも武士というより中市地区での有力者筋であった篤農家らしい。
- 5) 『愛日文庫目録』(大阪市立愛日小学校愛日教育会, 昭和61)の25ページ27にその影印あり。
- 6) 『愛日文庫目録』作成者の一人末中哲夫先生談。
- 7) 鈴鹿市「桂川甫周没後200年記念 西洋に知られた日本人～甫周と光太夫」(大黒屋光太夫記念館第5回特別展カタログ), 2009年。
- 8) 亀井高孝『葦蘆葉の屑籠』(時事通信社, 昭和44年), 463ページ～。
- 9) 若松尋常高等小学校「郷土誌光太夫篇」(年紀未詳)によれば多くが〈山下昇〉所蔵とあり, 光太夫の遺物とみなされていたようであるが, 亀井高孝『大黒屋光太夫』では小市の遺品と正す。『あけほの』12ページに写真掲載。
- 10) 中村喜和訳〈日本来航日誌〉(『大黒屋光太夫史料集』第3巻)による。
- 11) 仲見秀雄〈大黒屋光太夫らの帰郷文書〉(『三重の古文化』第58号, 三重郷土会, 昭和62年)等による。
- 12) 秦檜丸(1764-1808)か。
- 13) 第3節末を見よ。
- 14) 原本は閲覧したが書誌事項等は割愛する。次を参照せよ。山本祐子〈『猿猴庵合集 六編』一影印と翻刻一〉, 名古屋市博物館「研究紀要」第11巻, 昭和63年3月。
- 15) 参考文献11。
- 16) 岩井憲幸〈伊勢若松緑芳寺蔵 大黒屋光太夫遺物「箴言」について〉, 『窓』第78号, ナウカ, 1991年10月。
- 17) 第3節首参照。
- 18) 〈光太夫ら帰郷文書の点数改定について 5月26日 調査員 仲見秀雄〉による。
- 19) 後出の松汀木翁と同一人とみられるが, 伝記未詳。土地の有識者にて古老の一人か。代田氏によれば小市追善供養の折唱導役を勤め, 磯吉帰郷時は82歳であったという(『大黒屋光太夫だより』第31号, 2009年10月)。
- 20) 天理大学附属図書館所蔵・松平定信旧蔵。異名同一本として古河歴史博物館所蔵・鷹見泉石筆写『魯西亜言語集』, 早稲田大学図書館所蔵・勝俣詮吉旧蔵『魯西亜語覚書』の2本がある。
- 21) 辻正氏のご示教によれば, 〈木屋〉の屋号でかつて呼ばれていた家は, 現北若松の伊藤家だが, 当主は死去され, 菩提寺の過去帳は焼滅し, 昔の詳細は不明, ただ同家は材木商などを営んだ旧家であったとのことである。
- 22) 岩井憲幸〈鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』翻刻〉「明治大学教養論集」通巻457号, 2010年9月, を見よ。
- 23) 今回精査を逸し, 今参考文献8の第4巻の表記に従う。
- 24) 参考文献3に従う。

参考文献

*注で述べたものは再掲しない。

1. 亀井高孝編『北槎聞略』, 三秀舎, 昭和14年再版

2. 亀井高孝『大黒屋光太夫』, 吉川弘文館, 昭和45年
3. 亀井高孝・村山七郎・中村喜和『魯西亜辨語』, 近藤出版社, 昭和47年
4. 大黒屋光太夫顕彰会『あけぼの—大黒屋光太夫写真資料集—』, 平成5年
5. 鈴鹿市教育委員会「大黒屋光太夫帰国二百周年記念展 展示目録」, 平成5年
6. 仲見秀雄〈遭難以前の大黒屋光太夫〉, 「三重の古文化」第71号, 平成6年3月; 「光太夫らの帰郷」, 大黒屋光太夫顕彰会, 平成8年
7. 藤田福夫〈大黒屋光太夫配下磯吉の滯露体験記『極珍書』について〉, 「栢山女学園大学研究論集」第16号, 第2部, 昭和60年2月
8. 山下恒夫編纂『大黒屋光太夫史料集』第1巻~第4巻, 日本評論社, 2003年
9. 日本ロシア文学会編『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史—』, ナウカ, 2000年
10. В.М. Константинов, Оросиякоку суймудан (Сны о России), М., 1961.
11. Z.V. Uchastkina-J.S.G. Simmons, A History of Russian hand paper-mills and their watermarks, Hilversum, 1962.
12. С.А. Клепиков, Филиграни на бумаге русского производства XVIII-начала XX века, М., 1978.